

東アジア地域ガンカモ類重要生息地ネットワーク 支援・鳥類学研究者グループの設立と 日本鳥学会での自由集会開催の報告

神谷 要

(財) 中海水鳥国際交流基金財団, 683-0855 米子市彦名新田665

「日本の白鳥」23・24号で報告しましたように、ガンカモ類重要湿地ネットワークという企画が日本の環境省を中心に進められています。このグループを支援する目的で日本鳥学会の1999年の東京大学・2000年の札幌大会で自由集会が行なわれました。第一回では、白鳥に関する発表を神谷要が、第二回では、渡辺朝一氏が報告しましたのでその内容を紹介します。

日本におけるハクチョウ類の個体数変化

神谷 要 (米子水鳥公園)

世界には7種のハクチョウ類が生息している。このうち日本で越冬するハクチョウ類の大多数は、オオハクチョウとコハクチョウである。両種の日本における越冬地は、オオハクチョウよりコハクチョウの方が南に位置する傾向が見られる。

環境庁が毎年行っているガンカモ科鳥類の生息調査によると、日本における1974年のハクチョウ類の飛来数は、オオハクチョウ1.1万羽、コハクチョウ0.1万羽、計1.3万羽であった。1974年以降、日本に飛来するハクチョウ類の個体数は徐々に増加し、1998年の飛来数はオオハクチョウ3.1万羽、コハクチョウ2.4万羽、計5.7万羽となった。1974年のデータと1998年のデータは、調査面積、調査人員、観察場所の数が異なるので単純に比較することは難しいが、ハクチョウ類の飛来数の増加傾向はほぼ確実である。また、コハクチョウの割合の増加に符合して、オオハクチョウの越冬地にコハクチョウの飛来数が増えているという報告がある。これらの理由として、国内での保護政策の浸透、給餌、日本及び国外の越冬地環境の変化などが考えられる。

集団越冬地の南限である中海周辺の地域では、飛来するコハクチョウがネグラと

餌場(水田)にする場所をわけている。この地域へのコハクチョウの飛来数は、1972年には324羽であったものが、1998年には906羽に増加している。しかし、順調な増加だったわけではなく、1977年に803羽であった飛来数が、1981年には459羽に半減した。これは、コハクチョウがネグラとするような浅い水域が中海周辺ではほとんどないために、干拓工事中の浅瀬をネグラ環境としていたことが原因である。つまり、工事の進展によって浅瀬であるネグラが失われ、コハクチョウの飛来数が減少した。その後、コハクチョウは別の干拓工区(現米子水鳥公園)にネグラを移し、このネグラが保全されたことによって900~1,200羽の飛来数を維持している。このように、中海周辺へのコハクチョウの飛来数は、ネグラ環境の有無に左右されていることが過去の観察から分かる。つまり、コハクチョウにとってネグラの保全が重要といえる。